

第 52 回 株式会社 USEN 放送番組審議会 議事録

開催日時:平成 29 年 1 月 25 日 16:00～

開催場所:東京都港区北青山 3-1-2 USEN 本社

**■出席者**

湯川 れい子 委員長

富澤 一誠 委員

品田 英雄 委員

笈川 誠 委員

■欠席者

大林 宣彦 委員

■局側出席者

田村 代表取締役社長

大田 取締役常務執行役員

山下(光) コンテンツプロデュース統括部長

松本 コンテンツプロデュース統括部 編成部長

村田 コンテンツプロデュース統括部 制作部長

西田井 コンテンツプロデュース統括部 制作部 制作 1 課長

山下(幹) コンテンツプロデュース統括部 制作部 制作 2 課長

脇坂 番組制作ディレクター

遠藤 番組制作ディレクター

瀬戸 コンテンツプロデュース統括部 編成部 編成課長

沖 広報部長

【番組審議会事務局:薬師寺、大口、森角】**議事内容****1. 会社動向、放送事業動向についての報告****(1)『canaeru』サイトのオープンについて**

2016年12月1日、店舗経営に携わる方々の課題解決に役立つ記事や情報を掲載するサポートサイト『canaeru』をオープンした。

(2) 『Premium Reservation』のリリースについて

2016年10月14日、グルメサイト『ヒトサラ』から、全店ウェブでの即時予約可能な新サービス『Premium Reservation』をリリース。全国主要都市の高級店/人気店からヒトサラ編集部が厳選した飲食店を掲載する。

(3) 「オフィス環境に関する意識調査」実施について

2016年11月、全国の20～59歳の働く男女500名を対象に「オフィス環境に関する意識調査」を実施した。オフィス向け放送『Sound Design for OFFICE』、ストレスチェック『こころの保健室』では定期的にオフィス環境に関する調査を実施している。

(4) 「2016年間 USEN HIT ランキング」表彰式開催について

2016年12月13日、「2016年間 USEN HIT ランキング」表彰式を開催し、J-POP部門では宇多田ヒカル「花束を君に」、洋楽部門ではフィフス・ハーモニー「ワーク・フロム・ホーム feat. タイ・ダラー・サイン」を表彰した。

(5) 追悼番組の放送について

12月25日に享年53歳で逝去されたジョージ・マイケル氏を偲び、12月26日より1月31日まで「ワム！ジョージ・マイケル追悼特別番組」を放送した。

(6) 『With Music』発行について

2016年12月、会報誌『With Music vol. 38(2017年1～3月号)』を発行し、業務店/個人宅のお客様にお届けした。

2. 審議課題

(医療) 老人福祉施設をターゲットにした BGM 番組について

【対象番組】

■B-09 昭和の流行歌

■J-51 ザ・ナツメロ

■J-61 回想の音楽集

3. 番組審議

【放送局】

今回は老人福祉施設をターゲットに想定し、「B-09 昭和の流行歌」、「J-51 ザ・ナツメロ」、「J-61 回想の音楽集」の3番組について審議して頂きたい。

【審議委員】

いつもは番組を聴いて、「ああこんなに知らない曲がいっぱいあるんだ」と思いながらチェックをするものだが、今回は全然違い、私はまだ59歳だがほとんど知っている楽曲だった。選曲を楽しむというのとはちょっと違う気持ちで聴かせて頂いた。(老人福祉施設で)対象者と直接対話をしたり、イベントを絡めるなど様々な形で音楽の嗜好調査を行っているということだが、こんな風にしてやっているのかとすごく驚いた。これらの調査は具体的にどのように行ったのか、簡単に教えてもらえないか。

【放送局】

例えば、ある施設では月に1度、入居者の皆さんで集まって懐かしい思い出を語り合う「会話の時間」があり、そこに数名のスタッフが参加させて頂いて、音楽をテーマにお話を伺った。これはグループインタビューの形式だ。その施設で週に1度開催されている「カラオケ大会」にも参加させて頂き、カラオケ終了後に1対1で対話をしながら丁寧に思い出話を聴きながら調査を行ったこともある。また、懐かしい音楽に関係する写真や絵などのヒントを見せて曲名を当てて頂く連想クイズを行い、正解したらその曲を生演奏に合わせて皆さんで歌って頂くというオリジナルイベントを行った後にインタビューをしたこともある。このような調査では、WEBや紙で行うアンケート調査では出てこない、忘れていた大切な思い出の曲を集めることができる。

【審議委員】

定期的に訪問しているのか。

【放送局】

1度しか訪問させて頂いていない施設もあるが、趣向を変えて何度も訪問させて頂いた施設もある。何回か行くと顔を覚えていてくれて、気軽に話しかけてくださったりする。

【審議委員】

そういったフェイス・トゥ・フェイスでのフィールドワークの結果がこれだと思うと、すごく重く受け止めた。

ただ、「B-09 昭和の流行歌」の楽曲の中では、「青い山脈」、「リンゴの唄」は戦後の映画の映像が流れるような時代で、「月がとっても青いから」「ここに幸あり」あたりからだんだん私の生まれた時代になるのだが、ペギー葉山さんの「南国土佐を後にして」と黛ジュンさんの「天使の誘惑」の間には、実はすごく大きなギャップがある。最初はあまりの違いにちょっとビックリしたが、2回目聴くと全然気にならなくなって、それは何故なのだろうと思った。レストラン向けの（空気をちゃんと保つ）選曲に比べると、高齢者向けの施設の中では、その空気をつくるというよりは、1曲1曲が刺さるということが、むしろ大切なのかなと思ったが、自分の中では答えが出ないままだ。

「J-51 ザ・ナツメロ」は、1曲1曲に関して言えば「B-09 昭和の流行歌」と同様に面白かったり刺さったりしていいなと思ったが、さらに選曲の幅が広いので、トータルな空気と言うとちょっと…自分だったらどう受け止めるだろうと思ってしまった。番組名に“誰々の為の”という言葉が付けていないが、そういうのを付けてセグメントとして分かりやすくするか、そうではなく「どんな曲を集めた」というのを分かりやすく説明するのか、どちらが良いかは迷うところだ。「J-61 回想の音楽集」もせっかく作っているのにまだあまり利用されていないということであれば、もう少しフックになるような言葉を入れた方が良いのではないかと思ったが、これは今までの番組と違うので、どこを訴求すれば良いか迷ってしまった。

あともう1つは、私の父も2年くらいこういった施設に入っていたのだが、働いてる方がすごく大変だというものもある。以前「医療施設」について審議した時にも話にあったが、そういう方々のことを考える視点があっても良いと思った。

他にも、(59歳の)我々が入所する頃には、ディスコミュージックがかかるようになったりするのかなあ、とか、本当に考えることはいっぱいあった。解が見えないままで申し訳ないが、1番は調査、ウェブも含めてフィールドワークをどんどんやっけていき、老人向けの施設ではこういったものが提供できるというUSENとしてのノウハウを持っているといいのではないかと結論する。

【審議委員】

私の父親もおとし亡くなったが2年ほど施設に入っていた。脳梗塞、脳出血をやったので話すことは出来なかったのだが、やはり施設によってそういう重度の方と、自分から施設に入っていくような軽度の方とに分かれる。

実は今、店舗内装業界もシニアマーケットにもものすごく注目している。これまでそういう施設には内装という概念が無かったが、今はもう、色とかグラフィック、音、におい…こういったものにもものすごく力を入れている。だから、店舗内装業界の会社などと協議をするととても面白いのではないかと思った。

私は先日50歳になったばかりだが、父親が70代後半で亡くなり、母親が76歳でまだ元気だ。楽曲に関しては、母親が聴いていた曲ばかりだ。当時最高の有名メーカーのラジカセを買い、母親が喜んでカセットテープを集めていたことを思い出した。私も、ほぼすべての曲を聴かされた。洋楽以外は、洋楽は全く聴かない人だった。

【審議委員】

選曲に関しては、先程の話にもあったように色々あるとは思いますが、やや作り手側の切り口が強いと感じた。まずこの3番組の違いを言うと、「B-09 昭和の流行歌」は、番組名に“昭和”とついているから人気があるのだと思う。“昭和”と言うと、何となくイメージできるからその番組に合わせているのではないか。「J-51 ザ・ナツメロ」についても、私にとってのナツメロは80年代ロックだが、例えばそういうことだ。ネーミングについては、(前回の審議会でも指摘したので)しつこいようだが重要だと思う。

【放送局】

非常に貴重な意見だ。「J-51 ザ・ナツメロ」というネーミングに関しては、我々もちろん議論をしたのだが、「人によってナツメロは違う」というのはまさに仰る通りだ。

【審議委員】

「J-61 回想の音楽集」の“回想”というのも難しいのではないか。今デザインの世界でもそうなのだが、いかにそのストーリーを認知してもらうかが重要だ。“施設に行ってヒアリングして…”という素晴らしいストーリーがあるので、これを店舗のオーナーや施設のマネージャークラスの方に伝わるようにすれば、「ああ、そういう意図を持ってセレクトしているのか」というストーリーが伝わる。そうすると、「そこを聴きたい」と思ってもらえるオンリーワンの番組になっていくのではないかと感じた。

ひとつ言うと、自分はヘッドフォンで聴いたのだが、古い音源を使われているということで曲によっては音が聴こえ辛いのと、急に次の曲になるとゴーンと大きくなる場所があり、高齢の方がヘッドフォンで聴く場合を考えると少し気になった。最後に、タイトルごとに「この番組はどのような意図を持って作られているか」ということが解りやすく伝わる方法が開発されると、これこそがUSENのノウハウであり、それが一歩二歩リードできる結果を生むのではないか。ブレない統計と言われていた“人口動態”の変化により、先程の話のように「ナツメロ」という概念もどんどんスライドしていくと思うので、そこに独自のノウハウを乗せていくと、USENは最強のコンテンツビジネスを継承していけるのではないか。

【審議委員】

私はこれまで懐メロの番組に多く携わってきたから、ほとんどの曲は知っている。今回の「B-09 昭和の流行歌」もやはり聴くまでもないと思ったが、聴いたらほとんど知らない曲ばかりで、深いんだなあと思った。NHKの『ラジオ深夜便』に近いものがあつた。私は55歳で、あれ(「B-09 昭和の流行歌」)を聴いているのは多分75歳より上かなという感じだが、良い曲が沢山あって良かったと思う。何故かいきなり石原裕次郎さんや「君恋し」のオリジナル盤が出てきて、知らない曲がた

くさんあって面白かった。

「J-51 ザ・ナツメロ」に関しては、曲は知っているが、ボブ・ディランが入っていたり、橋幸夫が入っていたり、バラつき過ぎるのではないかも感じたが、「東京のバスガール」とか色んなものが入っていてこれはこれで面白いと思って聴いた。

「J-61 回想の音楽集」は、自分の中で一番ピンと来た。洋楽もあり、藤山一郎さんもあり、「愛の讃歌」もあり、西田敏行さんの「もしもピアノが弾けたなら」も、谷村新司さんもあり、坂本冬美さんの「また君に恋してる」も出てきて、ほとんど知っている曲だった。これがまさしく“ジャンルフリー”、“エイジフリー”で、私が提唱する「Age Free Music」に極めて近いという感じがした。「J-51 ザ・ナツメロ」に関しては、ちょっとバラつきが多過ぎるかなという感じがした。

タイトルに関しては、“昭和の”とつく「昭和の流行歌」と言うだけでも分かるが、「回想の音楽集」となると分かりづらい。もっとピンとくるタイトルをつけたら良いのではないか。例えば「大人の音楽」とか、分かりやすいのをつけたら素晴らしいことになると思う。「B-09 昭和の流行歌」は、自分の知らない曲もたくさんあり、もっと聴きたいと思った。「J-61 回想の音楽集」は、自分が知っている名曲ぞろいだから、それを聴いたとき「なるほどな」と納得した。まさしく自分の頭の中に、脳裏に、回想シーンが蘇ってくるっていう感じで、非常に良い番組だと思った。

【放送局】

今仰った「J-51 ザ・ナツメロ」の“バラつき”というのは、曲の時代的なバラつきなのか、洋楽邦楽など、セレクトのバラつきなのかで言うと、どちらか。

【審議委員】

「次は何の曲が来るのかな？」と思った時に、想像と違う曲が来るから、それが結構疲れる。「J-61 回想の音楽集」だと、無理なくて良い。「J-51 ザ・ナツメロ」の場合は、「何故これが来ちゃったのかな？」と考えてしまうので、頭の中で流れない。やはり、聴くのにちょっと疲れる。

【放送局】

いろんなジャンルが混ざってしまっているから、バラつきを感じるのだらうということは理解できる。

【審議委員】

「J-61 回想の音楽集」が一番面白かったという意見が出たが、選曲を見ると、今回の3番組の中で一番ばらついている。でも、確かに番組として聴くとすごく面白い。私などはもうこういう施設に入っている年齢なので、施設で聴いているとどうだろうかと想像しながら聴いてみたが、やはり難しいと感じるのは、選曲する方たち(番組制作者)にとって、音楽での追体験はし難いということ。その時代に生き、その空気とか、ざわつきとか、スピード感とかの中でその音楽を聴いた経験があるからこそその感覚は、後から楽曲だけ聴いてもまず掴めない。選曲のばらつき感が番組としてはすごく面白いが、施設の中で意識をこれに向けながら聴いていたとしたならば、ついて行けたかわからない。あっても良い番組だとは思いますが、人気が出るかどうかは疑問だと思った。

「J-51 ザ・ナツメロ」などは辛いと思うセレクションだった。60年代前後、東京で育った私にとっては、石原裕次郎さんとエルヴィス・プレスリーが並んで出てきても特に違和感はないが、そこにビートルズが出てくると違和感がある。60年代といってもビートルズは後半なので、文化として異質だからだ。そういうものが入ってくると、これはいったいどういうセレクションなのだろうと思ってしまう。そんなことは考えずに施設の中で何気なく聞いているのなら、それはそれで良いのかも知れないが、これはチャンネルとして必要なかと思った。そういうところで言うと、「B-09 昭和の流行歌」は“昭和初期

から昭和 35 年頃まで”ということだが、圧倒的に戦後の楽曲が多く、西暦でいうと 1945 年以降でまとめているので、(楽曲の)時代感がほとんど同じだから、施設にいらっしゃる 70 代～90 代の方たちにとって等しく「懐かしい曲」という世界観があるのではないかと。そうであれば、チャンネルとして存在する理由があると思う。

最近では、カラオケシステムでも 身体や頭の体操ゲームなど多彩な機能を持つものが老人福祉施設によく導入されているのだが、「J-51 ザ・ナツメロ」は、そのカラオケシステムの BGM(歌入り曲)の選曲と最もかぶっている。つまり、この番組はカラオケシステムと競合するとも言えるのではないだろうか。そういうことを踏まえると、安易に番組を作っても(勝てない)。昭和の始まりから(戦争の影響で)歌がなくなっていく頃、昭和 9～10 年辺りまでとか、昭和 20 年の終戦から昭和 30 年までといったように区切るとか、もう少しコンセプトを明確に持つて作るべきなのではないかと思う。J-POP ももう半世紀もあるわけだから、今施設に入っている人たちは聴いてきただろう。(番組の)色分けをきちんとすることも一つの方法かと思う。

【放送局】

音楽にどれだけ付加価値をつけられるかというところはしっかり考えていきたい。単に青春時代に聴いた音楽をもう一度聴きたいというニーズもあるが、例えば健康になるための音楽であったり、居心地の良い音楽であったり、音楽にプラスαの効能、効果をつけていくというところは我々も今まさに取り組んでいるところだ。ここは今後ご相談させていただきたい。

本日も様々なご意見を頂いたが、最後に頂いた「我々がこれらの番組をこれからどのようにしていくのか」はまさに課題だ。本日のキーワードを振り返ると、まず、我々の提供しているのは BGM だということがあった。一曲一曲が(聴取者に)刺されれば良いというのではなく、空間を作るための音楽としてはどうなのかも考慮すべきだろう。「音楽の追体験は難しい」という言葉もあったが、リアルタイムで聴いていた方に満足して頂くためには、SP 盤のあのノイズ入りのリアルな音の方が良いだろうと考えて番組を演出してきたが、あるいはそれは追体験ができない人間のエゴかも知れない。追体験は難しいという前提の中で、我々がこの時代の音楽番組をどちらのベクトルでもうまく作っていくことができなければと思う。一曲一曲刺されれば良いという価値観なのか、空間を作るという価値観なのか。そこはこの時代の音楽に触る時には考慮すべき部分ではないかということをお今日は考えさせて頂いた。

【審議委員】

音に対する好みは人それぞれだが、私はできるだけデジタルリミックスで、針音など雑音をなくしたものを再生して下さるならすごく良いと思う。

【放送局】

「B-09 昭和の流行歌」は選曲がまとまっていて、聴取者は共通の世界観を持ち安心して聴けるということもあったが、「J-61 回想の音楽集」は選曲の幅が広く、個人が意識を向けて聴くとバラバラに感じるというご意見もあれば、そのバラつき感が面白いということも言って頂いた。そこはまさに選曲の技術でもあるが、一つ一つの番組の存在意義やコンセプトについて今一度考えたい。その際、番組のネーミングや PR 方法もワンセットとして作っていかねばと思う。今回のターゲットは老人福祉施設だったが、この市場は今後も拡大していくところなので、本日頂いたご意見を踏まえ、より良き番組を作っていきたいと考えております。ありがとうございました。